

統語論・意味論・形態論の研究

中 島 平 三

この1年間は、英語学の統語論・意味論・形態論関係の図書が多数出版され、質・量ともに豊作の年であった。すべてをカバーしきれないが、手元に届いたものの中から記録に残しておきたいものの一部を選んで取り上げる。本文中、執筆者の敬称略。

著書の紹介・書評に入る前に、2014年3月11日に逝去された立命館大学名誉教授・児玉徳美氏に謹んで哀悼の意を表する。享年78。英語語法文法学会会長、同名誉顧問、日本英語学会評議員などを歴任。主著として、『依存文法の研究』（研究社）、『ヒト・ことば・社会』（開拓社）など、2011-12年にかけて紀要などで発表した論文をまとめた『ことばと意味』（開拓社）が遺作となった。

海外では、カリフォルニア大学バークレー校の名誉教授 Charles Fillmore が2014年2月13日に癌で逝去。享年84。1970, 80年代には格文法およびフレーム意味論で、90年代には構文文法で、それぞれ指導的な役割を果たした。スタンフォード大学の Ivan Sag が、同じく癌との闘病の末、2014年9月10日に63歳の若さで死去。一般化句構造文法、主要部駆動句構造文法といった1つの大きな流れを築いた。共に来日経験があり、多くの日本人研究者を育て、我が国の統語論・意味論・語用論研究に大きな影響を与えてきた。心よりご冥福をお祈りする。

まず生成文法関係から。現代英語の仮定法は、英語の直接法や命令法に比べても、ロマンス語系言語の仮定法に比べても、あまり脚光を浴びない「日陰者的存在」であるが、千葉修司『英語の仮定法——仮定法現在を中心に』（開拓社）は、仮定法現在を巡るテーマが実に多様で華やかであり、また言語理論的研究に大きく示唆する可能性を秘めていることを示している。例えば、現代英語の仮定法現在の否定形では *It is mandatory that Mary not have seen you before noon.* のように、迂言的助動詞 *do* が現れず、否定辞 *not* が本動詞ばかりではなく *have/be* 動詞よりも手前に生じることが知られているが、中英語や初期近代英語では *have/be* を含めた動詞全般の後方に生じており、現代英語でも方言によってはこうした語順が見られる。千葉は、この相違の原因を、仮定法節の AGR の強弱に求め、近代英語までは強かった AGR が動詞の語尾変化の退化（仮定法現在では動詞が原形と同形）に伴い弱くなり、その結果動詞繰上げが惹起されなくなったと理論的に説明する。動詞繰上げの適用・不適用が、語尾変化の豊かさに基づく AGR の強弱のパラメータに掛っていることを、仮定法の点から

説得的に裏付けている。本書では、仮定法を巡るテーマが網羅的に扱われているばかりではなく、筆者独自のデータの発掘や調査、手堅い典拠の明示、バリエーションに関しては歴史的変遷のみならず、英米以外の英語圏における状況・幼児の習得期英語・レジスターの違い・データベースなど多方向に目配りをしている点等々、様々な特徴が見られる。また欽定訳聖書を通読し、仮定法現在を認可する動詞・形容詞・名詞などを余すところなく調べた調査結果は、仮定法全般の研究にとって極めて貴重である。こうした本書の様々な特徴は、一貫して仮定法研究を中心にしながら、英語学・言語学の幅広い研鑽を着実に積み重ねてきた著者の研究姿勢に由来するものであろう。我が国の仮定法研究の記念すべき金字塔。

Ueno, Yoshio (上野義雄)の *An Automodular View of English Grammar* (早稲田大学出版部)は、シカゴ大学の J. Sadock が主唱する Automodular Grammar (AMG) に基づいて英語の主要現象を包括的に扱った力作である。AMG では、形態論、統語論、意味論などいくつかの独立したモジュールを設け、それぞれのモジュールが独自に生成的であり、いずれも文脈自由型の句構造規則によって定式化される。構造(樹形図)に基づく文法関係の定義や、意味役割と統語構造の写象などは生成文法の主流と通底しているが、移動や削除などによる派生を認めず、また焦点や話題などの情報構造を項構造・統語論・意味役割などと同等の独立したモジュール(文の構成素の正規の情報)としている点などでは立場を異にしている。本書の1つの独自の分析は、意味役割の構造を発話行為の発話内行為に拡大適用して、AMG の観点から1960年代の Ross らの遂行分析を捉え直し、改めて遂行分析の洞察を統語論と関係付けようとする試みである。著者が学生時代を過ごしたシカゴ大学の故 J. McCawley から受けた「1つの理論を選択したら、それを網羅的に、徹底的に言語現象に適用してみるべきだ」という助言を見事に実践した英文400ページに及ぶ大冊である。

運動様態動詞(run, swim, walk など)はそれ自体非有限的だが、到着点を表わす PP と共起すると有限的になる。音や光の放出動詞(rumble, sparkle など)は、方向を表わす PP と共起すると運動動詞となる。Isono Tatsuya (磯野達也), *Polysemy and Compositionality: Deriving Variable Behaviors of Motion Verbs and Prepositions* (ひつじ書房)は、こうした個々の動詞の様々な用法、それに伴う多義性を、生成語彙理論(Generative Lexicon)の枠組みで取り扱い、その過程で、Pustejovsky (1995)で明らかにされてこなかった点や問題点に対して独自の提案を行い、生成語彙理論全体の精緻化を試みる。例えば、Pustejovsky (1995)では事象構造の下位事象(subevent)として行為(process)と状態(state)の2種類しか設けられていなかったが、磯野は、第3の下位事象として移動または変化(movement or change)の必要性を提案する。この下位事象を設けることにより、例えば、同じ状態変化動詞でも、bake は自他交替できるが cut はできないことや、同じ場所句交替動詞でも spray は onto のような方向を表

わす PP を取ることができ load はできないことなどを、移動または変化の下位事象の有無に基づいて説明することが可能になる。また事象構造に現れるいくつかの下位事象のうちいずれが主要部 (headed) であるかという問題 (事象構造の主要部性) に関して、放出動詞を手掛かりにして、主要部となる下位事象は固定しているのではなく、共起する PP の種類によって変化し、それに伴って文型や場所句倒置の可能性が異なるという、興味深い事実を指摘している。

主に日本語を扱ったものであるが、Hoji, Hajime (傍士元) 『言語科学をめざして Issues on anaphora in Japanese』(大隅書店) は、氏のもとで博士論文を執筆した上山あゆみが傍士の論文の中から日本語の束縛関係に関する代表的な論文 7 編を選んで 1 冊にまとめたもの。アメリカを本拠地にして活躍しているので、我が国の読者には傍士よりも Hoji のほうが馴染み深く、その名前は欧米の言語学者の論文でしばしば言及・引用されており、日本語研究で最もよく知られ最も信頼されている研究者の一人と言えよう。まえがきを書かれた田窪行則の言葉を借りれば、チョムスキーの束縛原理 (A) (B) にそれぞれ日本語の「自分」「彼」を当てはめたのでは予測通りの結果にならず、傍士はこの事態を克服するために「あらためて束縛原理が扱うべき事象の本質を深く掘り下げ、それまでの英語の研究も包摂する形で組み立て直さなければならない」という思いに至り、その思いが本書に収められたすべての論文に貫かれている。古典的な重要論文にアクセスしやすくなったことを慶賀したい。

生成文法の形態論では、島村礼子『語と句の名付け機能——日英語の「形容詞＋名詞」形を中心に』(開拓社) が、日英の複合語、とりわけ「形容詞＋名詞」形の複合語を詳しく論じている。句が陳述する働きをするのに対して、語は名付けの機能を持つとされるが、名付けの働きをする複合語には完全に語であるもの (形態的複合語) ばかりではなく、句のようなもの (統語的複合語) もあることを、日英語の「形容詞＋名詞」形を中心にして説得的に明らかにする。この型の複合語に現れる形容詞にはモノの属性を表わす性質形容詞と、主に名詞から派生してタイプや種類を表わす関係形容詞がある。前者の場合、複合語の意味がそれを構成する形容詞と名詞から概ね決まる合成的なもの (gray elephant, cheap-price など) と、合成性を欠くもの (blackboard, darkroom など) に分けられ、合成的なものは句に近い N_0 (ゼロレベルで投射する名詞) であるのに対して、非合成的なものは完全な語を成す N である、と内部構造を区別する。関係形容詞の場合 (musical clock, atomic bomb など) も N_0 であり、語彙部門ではなく統語部門で生成される。複合語内の性質形容詞は、本来の属性の意味ではなくタイプを表わすことになり、「形容詞＋名詞」型複合語の形容詞は共通して分類的な働きをし、名付けの機能を果たしていることになる。日英の「形容詞＋名詞」形を中心にしながら、独自のデータを交えつつ丁寧に議論を展開し、筆者の一貫した長年の形態論研究の見事な集大成となっている。

上記の島村が形態論の複合を扱っているのに対して、西川盛雄『英語接辞の魅力——語彙力を高める単語のメカニズム』（開拓社言語・文化叢書）は派生を中心に論じている。接辞による派生の問題は、英語学の初修者にも受験を控えた高校生にも関心がある分野であり、また比較的理解しやすいテーマでもある。本書の魅力は、英語の接辞を幅広く取り上げ、それらの語源や、類似した意味の接辞同士の棲み分けなどが平明に示されている点である。特に巻末の付録「英語接辞リスト」は語源別に整理されており便利である。一見別々の接辞と思われるものが、実は1つの接辞の変異体（異形態）であることに気付かされる。変異体の多くが、基体の語頭音との同化によるものであるのだから、単に変異体の列挙に留めるのではなく、もう少し音韻論的に踏み込んだ説明があれば、章題にあるように「そうだったのかの接辞学」といっそう実感できるのではないだろうか。

同じく開拓社言語・文化叢書シリーズに収められた西原哲雄『文法とは何か——音韻・形態・意味・統語のインターフェイス』は、書名の主題よりも副題のインターフェイスに力点が置かれており、あまり類書のない新鮮な内容の著作である。どのインターフェイスの場合にも、著者の専門である音韻論が絡んでおり、その点で本全体が一貫している。音韻論と統語論のインターフェイスでは、移動によって残された痕跡の手前の助動詞はその手前の代名詞主語と縮約できないという事実がよく知られているが、空所化によって残された空所の手前でも語末子音が硬口蓋化し難いという具合に、削除による空所にも類似したことが当てはまる。また形態論と統語論のインターフェイスでは、ラテン語系動詞は与格構文から二重目的語構文への交替ができないとされているが、ラテン語系動詞でも第1音節に強勢が置かれる2音節動詞（promise, offer など）ではその限りではなく、donate では第2音節に強勢が置かれる場合には交替しないが、第1音節に置かれる場合には交替を許す話者がいるという、興味深い事実が報告されている。

今度は認知言語学関係について。Otani, Naoki (大谷直輝), *A Cognitive Analysis of Grammaticalized Functions of English Prepositions: From Spatial Sense to Grammatical and Discourse Functions* (開拓社) は、元来空間的位置関係を表わす前置詞が、文法的、談話的、直示的機能を担うように文法化し、新たな意味を得て多義化することを、認知言語学、機能談話文法の枠組みで説明を試みる。従来の多義性の研究はもっぱら意味論的であったが、本書は、文法的、談話的機能への意味拡張に注目することにより、多義性の研究を文法や談話、語用論へと関係付けようとする意欲的な作品である。こうした多義性研究における本書の独自性や、枠組みとなる認知言語学の基本概念や意味拡張の扱いをI部で丁寧に紹介したのちに、中心となるII部で、前置詞の文法化された用法の例を機能別に分類的に示す。(i) 格や相などの文法的機能の例として、与格の to や for, 属格の of, 終結相を表わす up や down, (ii) 文相互の

接続を表わす談話的機能の例として、条件の *under* や *with*、保留や逆転の *aside* や *apart*、(iii) 上下や離接を表わす直示的機能の例として、*come up/down* の斜体部などが挙げられる。意味拡張の認知的基盤として、著者は、空間関係を出発点とする概念化 (*conceptualization*) と談話の文脈に基づく慣用化 (*conventionalization*) を主張する。前置詞の文法化を具体例にして、認知言語学による意味拡張や意味変化の分析を分かり易く、きれいな英語で論じた若手研究者の著作らしい良書である。

開拓社言語・文化叢書シリーズの1冊、内田聖二『ことばを読む、心を読む——認知語用論入門』は、表出された言語表現を深く読み解き、さらにそれを通じて話し手の心(考え、意図、心情など)を読み解く理論としての認知語用論を、そこで用いられる概念や豊富な実例と共に平明に紹介する。シミリとメタファーの解説の中で、多くの場合シミリから *like* を取り除くとメタファーになるが (*He is (like) a computer*)、主語と述部が同じ範疇の場合にはなり難い (*He is *(like) the poet Ausonius*) などといったおもしろい指摘が見られるが、小欄の筆者にとって興味を惹かれたのは、コミュニケーションを行う上で必要な語用論的能力には、字義的意味を解釈できる能力ばかりではなく、明示されていない言語情報を補う能力、話し手の意図の意味を推論する能力、話し手の態度を推論する能力、言語習慣や文化の中で発話を解釈する能力などが含まれるという指摘である。興味を惹かれた理由は、中高校では「英語」という教科がなくなり「英語コミュニケーション」となったが、そこで行われているコミュニケーションは短いやり取りの「条件反射英語」に過ぎず、英語による英語の授業は生徒にとって答え易い限られた型にはまった質疑応答にほかならず、本書で指摘するコミュニケーションとは程遠い非コミュニケーションであることを改めて思い知らされたからである。英語の教育も、生徒の「こころを育てる」一環であることを忘れてはならない。

大津隆広『発話解釈の語用論』(九州大学出版会)は、関連性理論の枠組みで、グライスの会話の含意を包摂する発話解釈の問題を論じている。その1つの典型例が字義的解釈とは別の意味を表わすポライトネス表現の解釈である。ポライトネスの初期語用論研究として *Bach and Harnish (1979)* に言及しているが、この本は小欄の筆者が1980年にアリゾナ大学に留学した時に *Mike Harnish* がテキストとして使用し、教壇を所狭しと動きながら熱弁をふるって講義していたことを思い出させる、懐かしい本である。*Bach and Harnish* の字義性・非字義性、推論の直接性・間接性に基づくポライトネスの説明を、大津は、関連性理論の明示的意味と暗示的意味でより適切に捉え直す。この間の語用論研究における長足の進歩を実感させる例である。

次に一般読者にも興味を惹きそうな英語学関係の図書を数点見てみる。久野暲・高見健一『謎解きの英文法 省略と倒置』と『謎解きの英文法 時の表現』(くろしお出版)は、広く好評を博している「謎解きの英文法」シリーズの第5、6弾である。『省

略と倒置』の巻では、命令文、穴あけ、動詞句省略などの省略が関わる構文、There構文、場所句倒置、二重目的語構文など倒置や語順交替が関わる構文が扱われる。英語の空所化(Gapping)に対応する日本語の穴あけは空所化ではなく右枝接点線上げであり、穴あけの結果残留する2つの要素の間には省略された1つの構成素を復元することにより主語・述語の関係が成り立つようなものでなければならぬといった注目すべき提案が見られる。また、二重目的語構文では第1目的語と第2目的語の間には所有関係が成り立ち、与格構文ではPPの目的語と直接目的語の間にそうした関係が成り立たないと広く考えられているが、動詞によって必ずしもそうではないことを例文によって明らかにしている。

一方『時の表現』の巻では、時制、過去時制と現在完了の相違、通常進行形にならない状態動詞が進行形になる場合の意味、過去形による丁寧表現などが扱われている。特に時制の一致に関して、時制の照合(sequence of tenses)を受ける場合と受けない場合を絶対時制、相対時制という区別を導入することによりうまく説明している。どちらの巻でも、これまでの巻に比べると説明が少し専門的になってきているように思われるが、コラムでレトロニム(retronym)という日常生活でその例をよく耳にしながら聞きなれない造語法の話や、空港でよく耳にする英語表現の誤りを指摘するなど、一般読者をこのシリーズへ惹きつける工夫を怠っていない。

安井絵『英語はどんな言語か——より深く英語を知るために』(開拓社言語・文化叢書)は、長年英語と関わる中で考え抜かれ磨き上げられた珠玉のエッセイが21編収められている。英語のコミュニケーションや文法のコツを述べたもの、英語という言語の特徴・特性を明らかにしたもの、英語を学ぶ上での「力配分」を説いたものなどテーマは多岐に亘るが、専門用語に頼らない、肩の力を抜いた平明な筆致で、それぞれのテーマの真髄を突いている。書名と同名のエッセイでは、英語は、イエスベルセンが言うように男性的な言語であるとともに、不親切な言語、大人の言語、がっちりした構成体、と特徴付ける。他の章の議論も踏まえるならば、もう1つ楽観的・前向きの言語という性質を加えることができるかもしれない。英語学習の目的となる4技能のうち、もっと「書く」ことに力点を置くべきだという主張は、従来学習者が受動的になりがちであった英語学習に「能動的心入れ」を呼び起こす上で傾聴すべき示唆である。英語学習に臨界期があるとするれば、「大学卒業後の10年間」、とりわけ大学院生には院在籍の間であるという意見には全く同感であり、日頃似たようなことを院生に言っているが、では自分自身が、「盗聴」は eaves-dropping であるというような新たな発見に心ときめかしているかと問われると、院生に説教ばかりしてははいられない。

開拓社言語・文化叢書からは、上で触れたもの以外に、福田一雄『対人関係の言語学——ポライトネスからの眺め』、本多啓『知覚と行為の認知言語学——「私」は自分の外にある』、岡崎正男『英語の構造からみる英詩のすがた——文法・リズム・押韻』

回顧と展望

など、今年も多くの魅力的な著作が出た。

久保田正人『英語学点描』(開拓社)は、英語の語彙、発音、文法などの基本的なテーマ、特に「学習者がこんな質問をしてきたら」の章では英語の初修者が疑問に持つ前置詞 *to* と不定詞を導く *to* の関係、鯨文の意味などのテーマを、丁寧に、時として定説を越えて探っていく。英語学的に興味深いのは、接辞 *-able* が受動態ではなく能動態の意味を持つ例 (*comfortable*, *suitable* など) を OED で調べ、その初出がかなり早い年代であること、能動的意味と受動的意味の両方を持つ *serviceable*, *changeable* などは能動的意味の方が年代的に早いこと、年代的に早い本来的な用法だからといって後々まで生き長えやすいわけではないこと、といった事実が報告されている点である。ではどのような能動的用法が生き残っているのかと熟考するが、特定の因子は見当たらないと深く白旗を上げる辺りに、著者の研究への謙虚さと英語への慈しみが感じられる。

おもしろい認知言語学の入門書が登場した。先生役の西村義樹と生徒役の野矢茂樹による『言語学の教室——哲学者と学ぶ認知言語学』(中公新書)である。二人の「掛け合い」が実に絶妙で、硬派の言語学の話も、トークショーを聞くような感じで読み進んでいける。哲学者の野矢が、熟知していることも「知らぬ素振り」を演じて西村に問い質したり確認したりすることにより、難しめの説明を平明にしたり、不足を補ったり、読者を感心させたりする。西村の穏やかで紳士的な口調と、野矢のユーモアに富んだ調子で展開される教室の授業風景が目には浮かんでくるようだ。生成文法との対比を常に念頭に置きながら、認知言語学の得意とするプロトタイプ論、使役、メトノミー、メタファーと話が進んでいく。そうした中から、例えば、認知言語学が言語相対論や文化人類学的言語学、カント哲学と同じ方向に向かっていることなどが納得させられる。認知言語学に批判的な立場からは、認知言語学がやっていることは「後知恵」だとか反証可能性が担保されていないなどといった批判が予想されるが、そうした批判を先取りした上での「言語学には実証的といえる側面もある。だけど、全面的に実証的ではありえないし、私としては、実証的でないところに言語学の、少なくとも認知言語学の、大きな魅力がある」とする野矢の発言や、西村が引用しているラネカーの「できればちゃんとやりたいんだけど、言語がそういうもんじゃないんだからしょうがないんだよ」というつぶやきは、言語研究の在り方や多様性を考える上で示唆に富む。ことばのどのような側面に関心を向け、何を明らかにしようとするかは、結局のところ、関心や好みの違いに落ち着くのだろうか。

翻訳では、福井直樹と辻子美保子の手による Chomsky: *Syntactic Structures* の新訳・新書名『統辞構造論』が、岩波文庫から刊行されたことの意義が大きい(勇康雄訳では訳書名が『文法の構造』(1963年、研究社))。原著は1957年に刊行され、一般に生成文法誕生の書とされているが、正確にはその嚆矢は1955年に出版された *The*

Logical Structure of Linguistic Theory である。生成文法の「革命性」を理解する上で役立つと思われる同書の序論、さらに 80 ページに及ぶ訳者による「解説」が一緒に収められている。「解説」ではチョムスキーの少年時代、生成文法誕生当時の学問的事情や学界の雰囲気、革命と称される所以、当初掲げられた目標に沿っての理論の精緻化などが、整然と紹介されている。訳者によると、チョムスキーが言語研究に対してもたらした最も根源的な貢献は、『言語』という語にそれまでとは違う、革新的で整合された意味を与えたこと」であり、言語学の「学」とは「近代科学であるべきだと主張した」点にある。文庫本の刊行により、生成理論の真髓がさらに広く理解され普及することを期待したい。

もう 1 つ翻訳で、今井邦彦(監訳)『語用論キーターム事典』(開拓社)がおもしろい(原著は Nicholas Allott: *Key Terms in Pragmatics*)。用語解説を挟んで、「語用論とは」では語用論研究史、意味論など他分野との関係、語用論の諸理論などが手際よく紹介され、「主要研究者」では Grice や Austin ばかりではなく、Chomsky の語用論との関係も紹介されている。恰好な語用論入門書となっている。

今度は論文集について見てみる。岸本秀樹・由本陽子(編)『複雑述語研究の現在』(ひつじ書房)は、第 I 部で、主に日本語の複雑述語を取り上げ、第 II 部では、英語、中国語、スウェーデン語などの複雑述語を扱う。執筆者は執筆順に、小野尚之、岸本秀樹、Hiroto Hoshi、中谷健太郎、板東美智子、Florin Oprina、由本陽子、齋藤衛、當野能之、Mercedes Tubino-Blanco・Heidi Harley・Jason D. Haugen、今泉志奈子・藤縄康弘、磯野達也、境倫代、芝垣亮介、王蓓淳、青柳宏・張楠。

中野弘三・田中智之(編)『言語変化——動機とメカニズム』(開拓社)は、名古屋大学英文学会が第 50 回大会を記念して刊行した論文集。I 部の「統語変化」では、文を構成する (A) DP/NP 領域、(B) vP/VP 領域、(C) CP/TP 領域、(D) 補文構造ごとに整理され、II 部では「意味変化、文法化、その他」が扱われる。執筆者は、茨木正志郎、久米祐介、宋蔚、山村崇斗、吉田江依子、玉田貴裕、本多尚子、松元洋介、近藤亮一、縄田裕幸、石崎保明、大村光弘、大室剛志、中野弘三、楳田裕加、杉浦克哉、田中智之、中川聡、中川直志、横越梓、前田満、米倉紳。

遠藤喜雄(編)『世界に向けた日本語研究』(開拓社)は、ムード、発話行為、副詞、形容詞、複合語、フォーカス表現等について、日本語研究からの発信を意図した論文集。執筆者は、遠藤喜雄、小川芳樹、岸本秀樹、高野祐二、野田尚史、西山國雄、仁田義雄、前田雅子、益岡隆志、森山卓郎、山木戸浩子。

次に退職や還暦の記念を兼ねた記念論文集を 5 点、菊地朗・小川芳樹・西田光一(編)『言語におけるミスマッチ——福地肇教授退職記念論文集』(東北大学大学院情報科学研究科)は、統語と意味のミスマッチの研究に力を注いだ東北大学の福地肇氏の退職を記念して刊行されたもの。執筆者は、大室剛志、浅川照夫、内田恵、川平芳夫、金

回顧と展望

澤俣吾，桂川英也，岸浩介，三村敬之，菅原剛，田中拓郎，清水康樹，山田誠。

児玉一宏・小山哲春(編)『言語の創発と身体性——山梨正明教授退官記念論文集』(ひつじ書房)は、我が国の認知言語学を強力に牽引してきた山梨正明氏に献呈された退官記念論文集。I部「音韻・形態・語研究と言語類型」、II部「文法研究と談話」、III部「構文研究と談話」、IV「言語教育研究とコミュニケーション論」から成る。卷末に山梨正明氏の「〈随想〉学問と人生 京大の33年間を振り返る」が掲載されている。執筆者は執筆順に次の通り。深田智，仲本康一郎，奥垣内健，久保圭，伊藤薫，金光成，安在珉，中馬隼人，土屋智行，鬼頭修，寺崎知之，呂佳蓉，菅井紫野，黒澤義明，中野研一郎，尾谷昌則，濱野寛子，小川典子，小松原哲太，神澤克徳，田口慎也，出口雅也，山本雅子，澤田淳，碓井智子，木本幸憲，金杉高雄，甲田直美，永田由香，張又華，大谷直輝，年岡智見，高木勇，有光奈美，横森大輔，崎田智子，李在鎬，高水徹，安原和也，金丸敏幸，木原恵美子，児玉一宏，小山哲春。

西山佑司(編)『名詞句の世界——その意味と解釈の神秘に迫る』(ひつじ書房)は、長年コピュラ文の研究に取り組んできた西山佑司氏の古稀記念を兼ねた論文集。第I部「名詞句それ自体の意味」、第II部「コピュラ文と名詞句の解釈」、第III部「存在文と名詞句の解釈」、第IV部「変項名詞句の一般化」、第V部「名詞句の語用論的解釈」の5部から成る。執筆者：西山佑司，梶浦恭平，熊本千明，小屋逸樹，西川賢哉，峯島宏次，山泉実。

宮本陽一・高橋大厚・牧秀樹・越智正男・杉崎鉦司・内堀朝子(編)，*Deep Insights, Broad Perspectives—Essays in Honor of Mamoru Saito* (開拓社)は、日本人による生成文法研究のレベルの高さを世界に示した斎藤衛氏の還暦を祝い刊行された論集。英語による執筆なので執筆者を英綴りで表記すると，R. Amritavalli, Duk-Ho An, Adriana Belletti, Željko Bošković, Tomohiro Fujii, Günther Grewendorf, K.A. Jayaseelan, Kazunori Kikushima, Hideki Kishimoto, Masatoshi Koizumi, Howard Lasnik, Diane Lillo-Martin, Tzong-Hong Jonah Lin, Roger Martin, Masashi Nomura, Myung-Kwan Park, Luigi Rizzi, Keun-Won Sohn, Tatsuya Suzuki, Yuji Takano, Wei-Tien Dylan Tsai, Hiroyuki Ura, Juan Uriagereka.

小野尚之・近藤真・藏藤健雄・松岡和美・藤本幸治(編)『生成文法の軌跡と展望』(金星堂)は、多くの弟子を育てた小野隆啓氏の還暦を記念して刊行されたものであり、生成文法が歩んできた軌跡と展開を踏まえながらそのエッセンスを伝える。執筆者は、近藤真，藤本幸治，小野尚之，近藤真，藏藤健雄，田畑圭介，松岡和美，野村昌司，榎田裕加，北尾泰幸，平井大輔，小谷早稚江，島田将夫。

最後に教科書を3点。森雄一・高橋英光(編)『認知言語学 基礎から最前線へ』(くろしお出版)は、各章とも[基礎編]と[最前線編]の2部からなっており、基礎と発展が同時に学べる。執筆者は、高橋英光，森雄一の他に、鷺見幸美，笠貫葉子，伊藤健

統語論・意味論・形態論の研究

人, 大橋浩, 王安, 村尾治彦, 長谷部陽一郎.

三原健一・高見健一(編著)『日英対照 英語学の基礎』(くろしお出版)は, 音韻論, 形態論, 統語論, 意味論という基本的な領域を押さえると同時に, 統語論では生成文法と機能的構文論, 意味論では語彙意味論と認知意味論, 語用論, と立場を異にする複数のアプローチを並行して扱っている。「設問」や推薦図書も充実。執筆者は編著者の他に, 窪蘭晴夫, 竝木崇康, 小野尚之, 杉本孝司, 吉村あき子.

畠山雄二(編著)『ことばの本質に迫る理論言語学』(くろしお出版)は, 日本語文法, 認知文法, 機能文法, 生成文法の20のトピックについて「なぜ?」の疑問を投げかけ, その謎を解いていく「謎解きの言語学」(?)とでも呼べそうな入門書。編者の他に岸本秀樹, 谷口一美, 本田謙介, 田中江扶, 藤田耕司が執筆に加わっている.

冒頭で述べたように, 今年は英語学・言語学関係の著作が豊作であった。夏休みに入り本欄の執筆に取り掛かった時は, 棚の上に山と積まれた対象本の多さに圧倒されがちであったが, ここまで書き進むと, やはり自分が身を置いている世界が活気に溢れ, 旧知の知人や一面識もない若手研究者が健筆を揮っていることに, 我が事のように嬉しさを感じる。沢山の良書が出版されていることを多くの方に知ってもらい, それらの本に1冊でも多く手を伸ばして下さることを切に願う。(学習院大学教授)